

# 「開かれた」地域社会の重層性

## —— エスニックな観光地化する「新大久保」の事例から

申 惠 媛

### 1. 問いの所在

1980年代後半以降、いわゆるニューカマー外国人の急増した日本社会において、新たな「外国人集住地域」は大きな関心を集めてきた。現在、都内で最も多くの外国籍住民を抱える新宿区もそのひとつである。なかでも大久保地域<sup>1)</sup>の場合、地域内人口の約4人に1人が外国籍(2018年11月新宿区統計)というだけでなく、その多様性と流動性の高さを背景に、多くの研究において、この地域における「共生」状況が探究されてきた。<sup>2)</sup>

一方、この地域にはもうひとつ大きな特徴がある。2000年代以降、特に2010年前後をピークに、この新宿・大久保地域の一部エリア(概ねJR新大久保駅から明治通りまでの大久保通りと、これと並走する職安通りの二つの通りに挟まれたエリア)が、本場の韓国料理が楽しめ、韓国コスメや韓流・K-POPグッズが買える街「新大久保」として観光地化したことである。

このような「新大久保」の様子は、東京ディズニーランドのようなテーマパーク、あるいは「ポケモンGO」のようなAR(拡張現実)ゲームさえ彷彿とさせる。「○○グループが訪問したお店」や「SNSで有名な××料理が食べられるお店」、「新大久保発アイドルグループの公演」などを求めて訪れる人々に、住宅問題やゴミ問題のような「外国人集住地域」としての悩みや、「多文化共生」が目指される現場で常に課題となる「日本人/外国人」住民間の葛藤や摩擦などが意識されることはほとんどない。そのため、街を消費する来訪者らと、居住・生活者としてこの街を拠点とする人々は、同じ空間を共有しながらも、異なる世界を見つめているようにすら思える。こうした街のあり方が政策的に形成されたわけではないことや、特定の消費文化の「聖地」としての性格をもつことも、仮想世界のようなイメージを強める要因になっている。

しかしもちろん、言うまでもなく「新大久保」はARゲームではない。人々が求めて来訪する「お店」は現実存在し、実在の景観をつくりだし、匂いを漂わせ、廃棄物を生み出している。これらは絶えず葛藤の火種となり、この地域における生活の側面と否応なく接触しているばかりか、ときには埋め込まれてさえいる。

そして何よりも、これらの「お店」を提供する人々は、事業主体やプロデューサー、デザイナーなどの、特定の誰かや何かによって一元的に管理されているわけではない。この点において、「新大久保」—— およびその基盤となる大久保地域—— は、テーマパークや

<sup>1)</sup> 新宿区役所大久保特別出張所管内の地域を指す。ここでは、新宿区新宿自治創造研究所『研究所レポート2017 No. 2』(新宿区新宿自治創造研究所、2018年)に基づき、新宿6・7丁目、歌舞伎町2丁目、百人町1・2・3丁目、大久保1・2・3丁目として算出。

<sup>2)</sup> 代表的なものに、奥田道大・田嶋淳子編著『新宿のアジア系外国人』(めこん、1993年)など。

ARゲームとは決定的に異なる。そこでは複数の人間による相互作用とコミュニケーションが日々営まれており、それによって初めて、街が街として成立しているのである。その意味で、ここにあるのは、デュルケームの言葉を借りれば「社会的事実」そのものであり<sup>3)</sup>、それ自体がひとつの、あるいは複数の社会性の場になっている。言い換えれば、ここに関わる人々は、望むと望まざるとにかかわらず、全て観光地「新大久保」という舞台のアクターでありながら、かつ、大久保地域という「共生」の現場を生きる当事者でもある。

だからこそ、本稿で取り上げる大久保地域-「新大久保」は、現代の都市における「地域」や「地域社会」を考えるうえでひとつの示唆的な事例になりうる。現代の都市を生きる人々は、アーリのいうように、常に何らかの意味で「動いて」いる。<sup>4)</sup>「移動」といっても、通勤・通学などの日々くり返される短距離・短時間のものから、国境やときには国籍を越える「国際移民」まで、その形態は様々であり、一括りにできるわけではない。しかし、「コミュニティ」という言葉でかつて想像されていた、ほとんどの時間を同じ空間で過ごす生活様式とは異なる生き方が、事実上の標準になりつつある今日、新たな「地域」や「地域社会」のあり方が模索されていることもまた事実である。

現在の大久保地域-「新大久保」は、おそらくそのなかでも特異な、むしろ極端なものといえる。そのため決して一般的でも標準的でもないが、だからこそ、ひとつの「理念型」<sup>5)</sup>といえるのではないだろうか。本稿では、この地域で現在展開されている「共生」——「同じ空間を生きる」という根源的な意味での——の姿を見つめ直すことで、新しい社会性の場としての可能性について考えていきたい。

## 2. 事例の検討——大久保地域-「新大久保」

### (1) 当該地域の概要

本稿で注目する「新大久保」は、行政区域としては新宿区大久保地域に位置する。大久保地域の北部には都営住宅や公務員宿舎、高層の共同住宅等が立地し、中央部には大久保通りが東西に伸びている。大久保通りにはエスニック料理店を含む商店街が続き、その周辺には住宅地が広がる。<sup>6)</sup>

居住人口の社会増減の多さ（流動性の高さ）が指摘される新宿区の中であって、大久保地域における居住期間別人口割合は「20年以上」が26.1%と最も高く、「1年以上5年未満」が21.9%、「10年以上20年未満」が19.5%と続く。<sup>7)</sup>このような状況からは、戦前期においては都市郊外の住宅地であった大久保地域が、次第に「土地利用の曖昧な遷移地帯へと組みこまれ…エスニシティの変数を含み込んだ「新住民」と「旧住民」、そしてそれぞれのライフコースの一時期を過ごす「流動層」が、重層的・多面的に編み込まれた都市空間を

<sup>3)</sup> エミール・デュルケーム著、菊谷和宏訳『社会学的方法の規準』（講談社、2018年）。

<sup>4)</sup> ジョン・アーリ著、吉原直樹・伊藤嘉高訳『モビリティーズ——移動の社会学』（作品社、2015年）。

<sup>5)</sup> マックス・ウェーバー著、阿閉吉男・内藤莞爾訳『社会学の基礎概念』（恒星社厚生閣、1987年）。

<sup>6)</sup> 新宿区新宿自治創造研究所『研究所レポート2017 No. 2』、37頁。

<sup>7)</sup> 同上。ただし、「居住期間「不詳」」が23,820人と地域総人口の約半数を占めることに留意されたい。

形成してきた<sup>8)</sup>様相が浮かび上がってくる。

地域に居住する就業者の産業は、「卸売業、小売業」(13.5%)、「医療、福祉」(10.4%)、「宿泊業、飲食サービス業」(10.2%)の順に続くが、なかでも「宿泊業、飲食サービス業」の割合は新宿区全体に比べ高く<sup>9)</sup>、このことには当該地域におけるエスニック・ビジネスの集積も関係している可能性がある。地域に暮らす外国籍住民のみならず、エスニック・ビジネスの内訳のマルチエスニックさもまた特徴として挙げられるが、1990年代以降は職安通り・大久保通りを中心に韓国系ビジネスの著しい増加がみられた。

## (2) 先行研究の検討：「共生」という課題

ニューカマー外国人の受け入れ先となった新宿・大久保地域を事例に取り組みされた諸研究は、基本的に地域で生活する「外国人」とその受け入れ先となった地域の変容や課題を主題として取り上げてきた。<sup>10)</sup>なかでも、「日本人／外国人」住民間の生活上で生じる「(多文化)共生」の問題が注目されることが多く、具体的には、地域における諸活動や施設・市民団体、当該地域のニューカマー韓国人の生活・実践等に焦点が当てられてきた。近年では、「時に居住の近接性に基づかない「社会的集合」や「社会的凝集」<sup>11)</sup>のようなコミュニティの形成も見出されてきたが、ここにおいても、地域の「共生」状況、つまり地域で織りなされる諸社会関係に関する記述の重点は、依然として特定の地域におけるエスニックな差異性をもつ生活者どうしの関係性に置かれている。

「新大久保」の観光地化が話題となった2000年代後半以降は、観光地化振興への道筋、エスニック・コミュニティの成長(性質の変化)、ジェントリフィケーションなど、様々な切り口から「新大久保」の研究が取り込まれるようになった。<sup>12)</sup>その過程において大久保地域-「新大久保」における「共生」状況という主題は後退することもあったが、取り上げられる場合であっても、住民または生活者(ビジネス経営者を含む)間の関係性が中心となる傾向がみられる。

その背景には、地域における「(多文化)共生」研究が担われてきた日本の都市社会学、特に「都市エスニシティ論」と呼ばれる研究群においてフィールドとなってきた「地域」が、主に居住を中心とする生活空間として想定されてきたことが挙げられる。このことは、日

<sup>8)</sup> 阪口毅「『都市コミュニティ』の創発性への活動アプローチ——大都市インナーシティ・新宿大久保地区の市民活動を事例として」『日本都市社会学会年報』第33号(2015年)、111-12頁。

<sup>9)</sup> 新宿区新宿自治創造研究所「研究所レポート2017 No. 2」、37頁。

<sup>10)</sup> 奥田・田嶋編著『新宿のアジア系外国人』；川村千鶴子編著『多民族共生の街・新宿の底力』(明石書店、1998年)；川村千鶴子編著『移民国家日本』と多文化共生論——多文化都市・新宿の深層』(明石書店、2008年)；稲葉佳子『オオクボ 都市の力——多文化空間のダイナミズム』(学芸出版社、2008年)など。

<sup>11)</sup> 広田康生「推移する新宿「コア・タウン」における「場所形成」の諸相」『専修人間科学論集 社会学篇』第6巻第2号(2016年)、44頁。

<sup>12)</sup> 이와마 노부유키(Iwama, Nobuyuki)「신오오쿠보 코리아타운의 변용과 도시관광의 가능성」『한국속의 일본문화, 일본속의 한국문화』(2008年)、93-101頁；이호상(Lee, Ho-sang)「에스닉 커뮤니티 성장에 따른 지역사회의 변화: 도쿄 신오쿠보를 사례로」『한국도시지리학회지』第14巻第2号(2011年)、125-37頁；모리 요시타카(Mori, Yoshitaka)「도쿄 코리아타운 신오쿠보: 소수민족 문화의 상업화와 정치적 반응」신현준·이기용 편『아시아, 젠트리피케이션을 말하다』(푸른숲、2016年)、316-49頁など。

本の都市社会学において、社会を捉える基本的な単位として「地域社会」という閉じた分析単位が仮設されてきたこと<sup>13)</sup>、加えて、この「地域社会」という単位が居住を軸に考えられ<sup>14)</sup>、しばしば「(地域)コミュニティ」と言い換えられてきた<sup>15)</sup>ことに起因する。

さらに、従来、エスニシティの空間的集中<sup>16)</sup>については、特定のエスニック集団による居住の集中が、同胞(同エスニック集団)の生活上の必要を満たすためのエスニック・ビジネスの集中を呼び、これを通じてエスニック・コミュニティが形成され、場合によってはエスニック・ビジネスタウンに発展し、やがて衰退または転換するという発展段階的な展開モデル<sup>17)</sup>が想定されてきたことも背景として挙げられる。日本の事例においても、エスニック・ビジネスの形成・集積は、エスニック・コミュニティやネットワークの形成の基盤あるいはそれによって促進されるものとして位置づけられてきた。<sup>18)</sup>

しかし、「共生」を「同じ空間を生きる」人々が織りなす／編み込まれる諸社会関係として捉えるならば、各種「ブーム」に掻き立てられ、無数のイメージを生み出し、観光客を呼び込む観光地「新大久保」出現後のこの地域では、「共生」のアクターも、「共生」による乗り越えが目指される線引きのひとつとなってきたエスニックな差異性の認識・表出のされ方も、さらにはそれが展開される「地域」という「場」のあり方さえ、それ以前の状況とは変わっているのではないだろうか。以下では、これらの点に留意しながら、1980年代後半以降の大久保地域の変容と観光地「新大久保」の出現を概観し、大久保地域-「新大久保」における「共生」状況の変容の分析を試みる。

### (3) 変容と展開：「新大久保」の出現前後に着目して

#### a. 1980-90年代：「多文化共生」とエスニック・コミュニティの形成

この時期の大久保地域では、ニューカマー外国人の急増に伴い、「住宅問題」(借主・家主間でのトラブルや近隣住民どうしでのトラブル)のような、今日にまで続くいわば典型的な「多文化共生」の問題が生じ始めていた。同時に、この時期にはすでに、特定のエスニック集団の集住やエスニック・ビジネスの集積によって一部であれ日本語の不要な生活が可能になるという形でのエスニック・コミュニティの形成が見出されている。<sup>19)</sup>

<sup>13)</sup> 西澤晃彦「「地域」という神話——都市社会学者は何を見ないのか?」『社会学評論』第47巻第1号(1996年)、47-62頁；樋口直人「都市エスニシティ研究の再構築に向けて——都市社会学者は何を見ないできたのか」『年報社会学論集』第23号(2010年)、153-64頁。

<sup>14)</sup> 森岡清志「地域社会とは何だろう」森岡清志編『地域の社会学』(有斐閣、2008年)、21-43頁。

<sup>15)</sup> 玉野和志「コミュニティ」大澤真幸他編『現代社会学事典』(弘文堂、2012年)、459-60頁；武岡暢『生き延びる都市——新宿歌舞伎町の社会学』(新曜社、2017年)。

<sup>16)</sup> 特定地域へのエスニック集団の居住の集中、エスニック・ビジネスの集中、エスニック表象の集中などを総称して、暫定的にエスニシティの空間的集中と呼ぶこととする。

<sup>17)</sup> 杉浦直「エスニック・タウンの生成・発展モデルと米国日本人街における検証」『季刊地理学』第63号(2011年)、125-46頁。

<sup>18)</sup> 都築くるみ「エスニック・コミュニティの形成と「共生」——豊田市H団地の近年の展開から」『日本都市社会学年報』第16号(1998年)、89-102頁；小内透・酒井恵真編著『日系ブラジル人の定住化と地域社会——群馬県太田・大泉地区を事例として』(御茶の水書房、2001年)など。

<sup>19)</sup> 田嶋淳子「大都市インナーエリアにおける外国人居住」奥田道大・広田康生・田嶋淳子『外国人居住者と日本の地域社会』(明石書店、1994年)、36-128頁。



稲葉の調査によると、この地域の「エスニック系施設」<sup>20)</sup>は1991年から1998年までの間に計166件も増加しており、飲食業を中心に食品関連業、サービス業や宿泊業等であった業種構成も、医療業、不動産業、金融業、宗教等が加わり多様化している。<sup>21)</sup>ただし、当時のエスニック・ビジネスは基本的に「同胞向け」のものであったと考えられる。このことは、当時の「大久保」に関する雑誌記事において、この地域におけるエスニック系店舗（主にレストラン）が「ディープ」「本場の味」「同胞向け」といった表現とともに描写される傾向にあった<sup>22)</sup>ことから推察される。

一方、1990年代後半になると、東南アジア系店舗が多く取り上げられ「アジアタウン」や「エスニック・タウン」等と呼ばれていた傾向から一転し、中国系や韓国系店舗への言及が増え、大久保を「コリアタウン」や「リトル・ソウル」と呼ぶ傾向も見られる。実際に、大久保地域において「韓国人関連商業施設」が「外国人関連商業施設」に占める割合は、1993年には46.5%だったが、1998年になると67.3%に上昇している。<sup>23)</sup>このことは、2000年代以降の韓国系店舗を中心とする急速な観光地化の下地にもなっていた。

#### b. 2000年代～2010年代初頭：観光地「新大久保」の誕生

2000年代初頭に入ると、日韓共催ワールドカップや韓流ブームの影響により、韓国系店舗の急増がみられただけでなく、外観の派手な店舗が増えるなど景観が大きく変化した。それまで職安通りを中心としていた韓国系店舗の集積エリアが大久保通りへ拡大したのもこの時期であり、このことが地元の人々に街の変化を印象づけた。<sup>24)</sup>

ただし、この時期の韓国系店舗にあらわれた最大の特徴は、その主要な顧客層の変化、つまり「最初は同国人のためにはじまった飲食店が、エスニック・レストランとして日本人客を取り込んで」<sup>25)</sup>いく流れが、より多様な業種において、より急速に、より多く見られるようになったことである。

Kimの調査からは、1993年時点では計20件にとどまり、その業種構成も飲食店、食料品店、美容室等に過ぎなかった「韓国人関連商業施設」が、2001年にはその数が174件に増えただけでなく、その業種も事務所、エステティックサロン、インターネットカフェ、衣料品店、中古用品店、民泊、不動産業、書籍・CD店、質屋、薬局、カラオケ、病院などへと大幅に拡大した状況がうかがえる（2002年時点）。<sup>26)</sup>しかし、これらの「1990年代

<sup>20)</sup> 「エスニック系施設」は、(a)そのエスニック集団独特の商品やサービスを扱う施設、(b)日本語力が未熟な外国人を対象に商品やサービスを提供しようとする施設、(c)看板や表札等により、その存在が市街地空間において可視化された施設、という条件のうち「(a)、(b)、(c)」「(a)、(c)」「(b)、(c)」のいずれかを満たすものとして定義される（稲葉『オオクボ 都市の力』、80-81頁）。

<sup>21)</sup> 稲葉『オオクボ 都市の力』。

<sup>22)</sup> 申惠媛「「新大久保」の誕生——雑誌が見た地域の変容」『年報社会学論集』第29号(2016年)、44-55頁。

<sup>23)</sup> 김현숙(Kim, Hyun-Suk)「도오료오 오오쿠보의 한국인과 관련 상업시설 집중 메카니즘 및 그 영향에 관한 연구」『국토계획』第38卷第1号(2003年)、67-82頁。

<sup>24)</sup> 稲葉佳子「受け継がれていく新住民の街の遺伝子」川村千鶴子編著『「移民国家日本」と多文化共生論』、51-74頁。

<sup>25)</sup> 稲葉『オオクボ 都市の力』、96頁。

<sup>26)</sup> 김「도오료오 오오쿠보의 한국인과 관련 상업시설 집중 메카니즘 및 그 영향에 관한 연구」。

初頭からの10年間で展開された業種は日本文化に不慣れな同胞向けの業種であった」。<sup>27)</sup>

これに対し、2013年には韓国系施設の業種構成や主要顧客層がさらなる変化を見せていることが確認できるが、なかでも韓流グッズ店や韓国コスメ店が新たな業種として出現したことは、提供される財の新規性や顧客層の拡大という点で特筆すべき出来事といえる。<sup>28)</sup> このようなエスニック・ビジネスの性質の変容は、2000年代後半以降の観光地「新大久保」の出現につながると同時に、またそれによって促進されていった。このようにして、観光地「新大久保」は、「大久保」のもつ(エスニック・コミュニティと連続的な)「エスニック・タウン」的要素や「生活感」を捨象し、独特の賑わいと煽情性を帯びた街として出現し、消費されていったのである。<sup>29)</sup>

しかし、この地域における韓国系ビジネスが完全にホスト社会向けの観光資源としてのそれにとって代わられたのかというと、必ずしもそうとはいえない。金は、美容室など「同胞を対象にしたサービス業」について、その「絶対数は増加したものの、2002年時点の業種構成と比較してさらなる業種の多様化は認め」難く、「同胞顧客への財やサービスの提供機能は少なからず弱化した」<sup>30)</sup> としているが、裏を返せば、同胞向けビジネスは相対的に「弱化」しながらも生き残り続けているといえる。これに加えて、エスニック・ビジネスの発展が地域内に「職」をもたらし、その「職」がさらに「住」を呼び寄せるというサイクルが生まれている<sup>31)</sup> という稲葉の指摘からも、大久保地域-「新大久保」におけるエスニックな観光地の発展は、居住・生活者の集中を伴うエスニック・コミュニティの形成と同時並行的に展開されていると推察される。<sup>32)</sup>

さらに、新規来住者の継続により、居住・生活者どうしの「多文化共生」の問題も依然として見受けられる。エスニック・コミュニティの形成がみられたとはいえ、ホスト社会と断絶しているわけではなく、地域内の日本人居住者・事業者と混住・混在する形で存在しているためである。たとえば、広田の調査では、1980-90年代から指摘されてきた「住宅問題」が、2012年時点でも残り続けている状況が記述されている。<sup>33)</sup>

以上を踏まえると、2000年代の観光地化を経た大久保地域-「新大久保」では、「日本人がイメージするエスニックタウンが形成される一方で、見えないエスニック世界も広がって」<sup>34)</sup> いて、これらが複雑に絡み合っていたという1990年代後半の大久保地域の、いわば「重層的」な状況が、さらに「観光地」と「生活空間」という形でも展開していったと考えることができる。この地域では日本や韓国に限定されない、よりマルチエスニックな居

27) 金延景「東京都新宿区大久保地区における韓国系ビジネスの機能変容——経営者のエスニック戦略に着目して」『地理学評論』第89巻第4号(2016年)、174頁。

28) 同上論文。

29) 申「「新大久保」の誕生」。

30) 金「東京都新宿区大久保地区における韓国系ビジネスの機能変容」、175-78頁。

31) 稲葉『オオクボ 都市の力』。

32) また、エスニックな紐帯を基盤とする生活上/ビジネス上の団体・組織の存在は、必ずしも地域に限定されない形で「コミュニティ」の存続・発展を示唆するものといえるだろう。

33) 広田「推移する新宿「コリア・タウン」における「場所形成」の諸相」。

34) 稲葉『オオクボ 都市の力』、100頁。

住者・事業者が日常的に関わり合っていることも、このような重層性を際立たせる要因のひとつになっていると予想される。

#### c. 2010年代初頭以降：危機と変容

以上のような観光地「新大久保」はしかし、2010年代初頭をピークとし、その後一度衰退を迎える。これはコリアンタウン・韓流の聖地としての「新大久保」にとっての「危機」であると同時に、地域にとっては再びの「変容」の局面でもあった。このような危機・変容のなかで、それまでいわば自然発生的に形成されたものと認識され<sup>35)</sup>、地域住民や一部を除く商店主にとっては関係のない出来事として考えられていた観光地「新大久保」は、より広範な地域関係者にとっての積極的な維持・管理の対象ともなってきた。

たとえば、2014年の「新宿韓国商人連合会」の発足は、観光地「新大久保」の再活性化を目指す積極的な動きとして挙げられる。発足式に向けた会議では、「地域を多文化共生地域として発展させていくため、我々が手を取り合い第3の韓流の火種を起こそう」「既存団体と共存しながらも、この地域に特化した韓人団体として根付くことができるよう力を合わせてほしい」「外部環境に左右されないため、初心に帰ってこの困難を克服していこう」といった形で、この連合会の趣旨・目的に対する賛同の声が上げられた。<sup>36)</sup> ここからは、個別商店や脱領域的なエスニック・コミュニティの発展ではなく、地域に根ざした観光地「新大久保」のマネジメントが意識的に目指されるようになった様子がうかがえる。

また、来訪者による騒音や混雑、ゴミのポイ捨てなど、観光地化が招来した様々な「問題」への対処が地域レベルで求められ、メディア上で度々取り上げられるようになったことも、観光地「新大久保」的側面への積極的な働きかけが生じた背景として挙げられる。新大久保商店街を中心に地域の多国籍事業者らが集まる「インターナショナル事業者交流会」(2017年～)においても、地域で深刻化しているゴミ問題の解決方法が議題のひとつとして取り上げられた。<sup>37)</sup> ここからは、「居住・生活者」と「観光客」が物理的な空間を共有することで新たな関係性に組み込まれるようになったこと、そして、そのことがエスニシティの垣根を越えた協力関係を拓く契機にもなっている状況を見出すことができる。

#### d. 観光地化が地域にもたらした変化

以上から、観光地化が地域にもたらした変化として、次のような相互に関連する3点を挙げておきたい。

- ① エスニック・ビジネスの集積および性質の変容：特に、主要な顧客層が同胞（同エスニック集団）にとどまらず、ホスト社会を主とする他のエスニック集団に拡大・移行したことが大きな特徴として挙げられる。ただし、このことは「同胞向け」ビジネスのまったくの衰退や、エスニックな紐帯の喪失を意味するわけではない。
- ② 観光客という一時的滞留者の流入：観光客は、地域「外部」に居住・生活の拠点を持

<sup>35)</sup> フィールドノート(2018年1月12日)に基づく。

<sup>36)</sup> 新宿韓国商人連合会の議事録(2014年9月19日)より抜粋。作成者である連合会の了承を得て閲覧した。

<sup>37)</sup> フィールドノート(2018年7月25日)に基づく。

ちながら、特定の（地域）イメージに引き寄せられて集まり、特定の商品消費するアクターとして出現した。そのため、観光客は従来、地域「外部」の存在として扱われる傾向にあるが、実際には、物理的空間を共有することによって直接的・間接的に大久保地域-「新大久保」に影響を与える存在にもなっている。

- ③地域「外部」で生成されるイメージとの相互作用：観光地化（とその衰退）は、メディアの報道によって加速したり、場合によってはつくりだされる。一方、地域「内部」の側から、このような「外部」で生成されるイメージの維持・管理に働きかけることもある。

### 3. 理論的考察

#### (1) 「開かれた」地域社会の分析に向けて

観光地化がもたらした以上のような変化は、大久保地域-「新大久保」における「共生」状況をどのように変容させたのだろうか。その分析を試みるためには、まず、地域「外部」の主体・文脈に対して「開かれた」形での分析枠組みの設定が必要になる。ここでは、同様の観点を提示した先行研究を参照しながら、設定を試みたい。

日本の都市社会学が「地域」を定住者中心の独立的・同質的な単位として設定してきたことを批判した西澤は、その解決策のひとつとして、社会過程論の再評価を提案している。これは「社会過程が進行する場——ある集団・コミュニティとその外部との〈間〉、仮に社交空間とでも呼んでおこう——を仮設することの重要性」の再評価を意味し、「都市の多様な諸世界・コミュニティが接触し合い、関係を持ち、影響を及ぼし合うこの社交空間に生起する社会過程」<sup>38)</sup>への注目を促すものであった。このような「場」の設定は、居住を中心とする生活世界という単一的な機能に還元されなくなった「地域」を考察可能にし、「住民」として閉じ直されてしまわない「異質な」主体への「開かれ方」の視点を提供する。

したがって、第一に、本稿では大久保地域-「新大久保」を、居住・生活空間をも巻き込んで観光地化した「複合的な社会性の場」、つまり、居住・生活者どうしの社会関係や観光地化がもたらした社会関係が同時に組み込まれ、これらが互いに影響を及ぼし合い、ときに変容するような社会過程の場として設定する。

一方、西澤の議論を一部引き継ぎながら都市エスニシティ論を批判的に検討した樋口は、「地域社会」が構造的・制度的文脈から切り離された形で設定されてきたために、国家や市場といった変数が見落とされてきた点を批判し、「地域社会と国家・資本の交錯という観点から、眼前の移民コミュニティを分析する」<sup>39)</sup>ことを解決策のひとつとして挙げている。しかし、このような「外部」の文脈・構造への「開かれ方」は、上記のように特定の空間内での異質な主体間の接触・関係に注目する視座と、どのように接続することができるのだろうか。

<sup>38)</sup> 西澤「『地域』という神話」、59頁。

<sup>39)</sup> 樋口「都市エスニシティ研究の再構築に向けて」、161頁。



そこで、第二に、先に設定した「場」におけるアクターが移動可能な主体であることに留意する。これは、観光客のような、対象となる空間的範囲の「外部」に居住・生活の拠点を置く一時的滞留者に限った話ではなく、その内部に居住・生活の拠点を置く者であっても、通勤・通学のような形で物理的な空間の範囲を越えて移動したり、ネットワークのような形で物理的空間範囲に制限されることなく他者と関係を結ぶことができることを踏まえるということを意味する。ここにおいて、物理的な空間的範囲としての「地域」と、それに定位する各種「社会関係」(移動可能なアクターによって織りなされる)は、区別される。<sup>40)</sup>

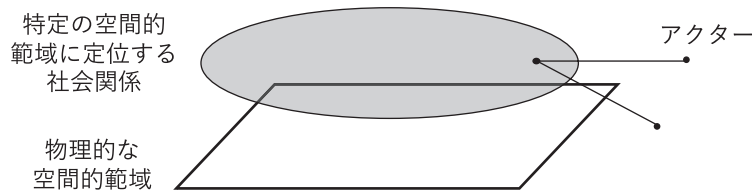


図1 分析枠組み設定の試み(1)

このように、特定の「場」にかかわるアクターを、物理的にも、共同性の形成という点でも移動可能な形で想定することで、各アクターを、場のなかで形成される社会過程・関係に局限されない、より広範な文脈や構造に埋め込まれた存在として捉えることが可能になる。それには、「観光客」が置かれた／呼び寄せたホスト社会の文脈——政治的なものをも内包する様々な「イメージ」など——も含まれる。

## (2) 社会関係の重層性とダイナミズム

それでは、このような分析枠組みを用いて、大久保地域-「新大久保」における「共生」の変容をどのように分析することができるだろうか。以下では、エスニック・ビジネスの集積および性質の変容に着目して分析を試みる。

前節では、当該地域において、エスニック・コミュニティを支える同胞向けビジネスが弱化する一方、観光地化に伴い、主要な顧客層を同胞以外とする観光資

<sup>40)</sup> 主体の移動性を考慮するという点において、本研究は、磯村英一の議論を踏まえて「大久保地域」を第一空間・第二空間・第三空間としての側面を併せもつものとして捉え、その構成員として「定住者」以外をも組み込んだ阪口の研究と問題関心を共有する(阪口毅「都市コミュニティ」の移動性と領域性に関する調査研究——インナーエリア・新宿大久保地域と「集会的な出来事」のエスノグラフィー」中央大学大学院文学研究科社会学専攻博士論文、2016年)。ただし、阪口の研究における中心的な問いは「移動性に特徴づけられ、脱領域的に広がる「都市コミュニティ」において、ある特定の時間と空間に、どのような「象徴的な領域性」が構築されるのかという問題」(同上、12頁)であるため、領域性の設定については異なる立場をとることになる。後述するように、本研究は「観光客」と「居住・生活者」がはじめに織り込まれていたような、特定の物理的空間を共有することで生じる「並存」の社会関係(安田三郎他編『基礎社会学 第Ⅱ巻 社会過程』東洋経済新報社、1981年)や、「薄い」共同性(武岡『生き延びる都市』)をもつような関係性も含めて対象化するために、領域性をア priori に(関係概念ではなく物理的な範囲として)設定するためである。ただし、このときの物理的空間の範囲は、「場」にかかわる人々の認識を反映して設定される。

源としてのエスニック・ビジネスが増加してきたことを確認した。後者の場合、前者とは違って、需要と供給の両方において特定エスニック集団の「集住」を必須とはしなくなり、他のエスニック集団向けにエスニシティが演出されるような状況も生じると予想される。つまり、エスニックな観光地化は、生活上の必要を満たすためのエスニック・ビジネスの集積や、文化や言語の維持を目的のひとつとするエスニック・コミュニティの形成とは異なるエスニシティの空間的集中のあり方とみることができる。

しかし、くり返しになるが、ここで重要なことは、大久保地域-「新大久保」では、このようなエスニックな観光地化が、完全なる移行ではなく複線化としてあらわれているということである。そのために、居住・生活者を主要なアクターとする「エスニック・コミュニティの形成／多文化共生の問題化」と、「観光客向けのエスニックな観光資源の提供と消費」は、同一空間において重層的に展開されることになる。

このような状況は、はじめに触れたように、「ポケモンGO」を思い起こさせる。「プレイヤーの肉体は公園を歩いている。だがそれを律しているのはあちら側の秩序である……ポケモンGOの仮想世界が、プレイヤーの身体を介して現実世界に重ねられた」<sup>41)</sup>という、同ゲームが引き起こした「空間の意味の上書き」は、一面において、観光地「新大久保」の大久保地域における異質さ・重層性にも通じるためである。

石川はこのことを「ルールのレイヤー」と題して表現しているが、このような観点を取り入れると、大久保地域-「新大久保」において展開される、観光資源を媒介とする社会関係は、同じ空間を居住・生活の拠点として利用する者どうしが形成する社会関係と「異なるルール」によって運用される「レイヤー」として考えることができる。物理的空間領域に定位する社会関係は、異なるレイヤーとして重層的に展開されうるのである。

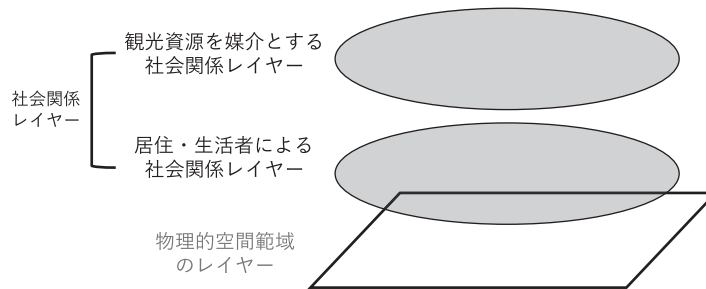


図2 分析枠組み設定の試み(2)

このとき、二つの社会関係レイヤーはどのような関係に置かれるのだろうか。また、各レイヤーの内側ではどのような社会過程が展開されているのだろうか。まず、ニューカマー外国人の急増によってもたらされた「日本人／外国人」住民どうしの生活上の葛藤・軋轢という、いわば典型的な「多文化共生」の問題化は、居住・生活者によって構成される社会関係レイヤー「内」に生じた関係性のひとつとみることができる。

<sup>41)</sup> 石川初『思考としてのランドスケープ 地上学への誘い——歩くこと、見つけること、育てること』(LIXIL出版、2018年)、47-48頁。

一方、観光地化という出来事は、異なるレイヤーとしてあらわれたために、多くの居住・生活者にとっておそらくはじめは「並存」の関係<sup>42)</sup>として出現したと予想されるが、騒音や混雑、ゴミなどの「問題」が激化するとともに、その意味内容が変化してきたのではないだろうか。これは重層的な社会関係レイヤー「間」に生じた関係性であるといえ、観光・開発社会学等においては「地元／よそ者」のような形で見出されてきたものに当たると考えられる。

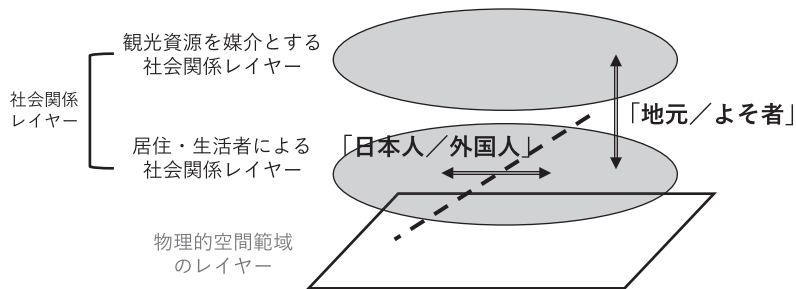


図3 社会関係レイヤー内／間の関係性

ただし、次の点に留意する必要がある。すなわち、大久保地域-「新大久保」にあらわれた「もうひとつの社会関係レイヤー」は、「ポケモンGO」のような仮想世界ではなく、実在の店舗やその経営者・従事者によって可能になっているという点である。したがって、このとき、地域のビジネス経営者は、両方の社会関係レイヤーに属するアクターとなる。<sup>43)</sup>はじめは観光資源を提供する一部のエスニック・ビジネス経営者のみが両方の社会関係レイヤーに属していたとしても、「問題」や目標の共有を通じて、次第により広範囲にわたる地域のビジネス経営者がこうした「橋渡し」の役割を担うようになり、今では新しい協力関係が築かれ始めているとみることができるのではないだろうか。だとすれば、地域のビジネス経営者は、居住・生活者であると同時に、そこから区別される機能をもつアクターとして位置づけられる。

つまり、観光地化とそれに伴う地域の変化は、「多文化共生」のような形で目指されてきた、文化（エスニシティ）の差異を強調する既存の二項対立的な関係性（「日本人／外国人」）の調整の試みを変容させる契機を与えたのであり、そのことがまた、新たにもたらされたもうひとつの二項対立的な関係性（「地元／よそ者」）の調整という課題に対応するためのアクターの出現（分化）を可能にしたとみることができる。観光地化前後の大久保地域-「新大久保」から見えてきたのは、このような諸社会過程・関係の生成・変容のダイナミズムであった。

<sup>42)</sup> 安田他編『基礎社会学 第Ⅱ巻 社会過程』。

<sup>43)</sup> すでに確認したように、観光地化した状況においては、ビジネス経営者・従業者の居住の拠点が久保地域近辺でない可能性も高い。しかし、当該地域に店舗をもつ、あるいはその店舗で働く者は、所有ないし職業という形で（少なくとも「観光客」とは区別される）地域にかかわる「生活者」といえる。

#### 4. 結語——「多文化共生」の先に

以上、限定的な事例検討をもとに、きわめて試論的にはあるが、観光地化が地域にもたらした変化に着目し、大久保地域-「新大久保」における「共生」状況の変容を分析してきた。結果、この「複合的な社会性の場」における「共生」——「同じ空間を生きる」者どうしが織りなす／編み込まれるいくつもの社会関係——は、観光地化を経て、新しい関係性を獲得しただけでなく、その意味内容の変化、さらには既存の関係性の変容までも含む形で、めまぐるしく再編されてきたといえる。

エスニシティの観光資源化については、しばしば否定的な意味合いが付与されてもきた。それは、このことが「多文化共生」の3F（ファッション・フード・フェスティバル）への還元<sup>44)</sup>など、「多様性がもてはやされはしても、それはあくまで厳格な条件にかなう場合のみに限る」<sup>45)</sup>という「コスメティック・マルチカルチュラリズム」につながりやすいためである。また、「エスニックな観光地」の出現についても、コンセプトに基づく都市空間の意味づけと消費<sup>46)</sup>、シティ・セールス競争の激化の渦中における多様性の称揚<sup>47)</sup>といった文脈で、資本・市場の論理のもとでの差異の記号化・再編成とその弊害が指摘されてきた。

しかし、本稿で見出されたのは、観光地「新大久保」の出現による、地域で織りなされる「共生」のあり方の再編可能性である。これは、共通の目標ないし脅威をもつことによる協力関係の促進や、観光産業による利益をめぐる競争の激化のような「外国人街の観光地化」が民族関係に与える影響<sup>48)</sup>にとどまらない、観光客をもアクターとして含み込んだ、特定の物理的空間範囲に定位する諸社会関係の再編であり、膠着化してしまいがちな二項対立的図式を揺り動かす可能性である。

だとすれば、エスニックな観光地化を経た大久保地域-「新大久保」を、「希薄化した」あるいは「商品化された」エスニック・コミュニティとして、または——観光客によるゴミの問題に関連して一部メディアでいわれているような——「スラム化した」多文化共生の現場としてみるのではなく、地域社会のもうひとつの形 (alternative) として捉え返すこともできるのではないだろうか。このような観点に基づくより詳細な研究を今後の課題としながら、本稿を終えたい。

(受理 2019年1月3日)

(掲載決定 2019年1月13日)

<sup>44)</sup> 竹沢泰子「序論 移民研究から多文化共生を考える」日本移民学会編『移民研究と多文化共生』（御茶の水書房、2011年）、1-17頁。

<sup>45)</sup> テッサ・モーリス＝スズキ『批判的想像力のために——グローバル化時代の日本』（平凡社、2002年→2013年）、184頁。

<sup>46)</sup> 町村敬志『「世界都市」東京の構造転換』（東京大学出版会、1994年）。

<sup>47)</sup> 五十嵐泰正「多文化都市におけるセキュリティとコミュニティ形成」『社会学評論』第62巻第4号(2012年)、521-35頁。

<sup>48)</sup> 丸山奈穂「外国人街の観光地化と民族関係——群馬県大泉町のブラジル人街を例に」『地域政策研究』（高崎経済大学地域政策学会）第17巻第2号(2014年)、57-68頁。